グリーンケミストリー知識普及講演会のご案内

鍾乳石からひとと自然の関わりを紐解く－化学の考古学への挑戦

日時：平成 25 年 10 月 26 日(土)　14：00－15：30
会場：理学部 B 棟 3F B303 講義室
講師：吉村　和久　九州大学理学研究院教授
主催：グリーンケミストリー連携教育研究センター

講演概要

秋吉台は草原カルストとして世界にも名前が知られています。湿潤温帯域において草原は、火入れ、放牧、採草などの適度な人間活動によりはじめて維持できるものであり、秋吉台も例外ではありません。それでは、本来森であった秋吉台がいつごろから草原植生に変わったのでしょうか。この疑問は秋吉台の鍾乳洞の石筍の研究から答えを出すことができました。秋吉台に限らず、現在草原が残っている地域では、おおよそ江戸時代前後から草原化していったことも、日本各地の鍾乳洞の石筍の研究から明らかにされてきました。

同様に、秋吉台麓の長登銅山では、黄銅鉱のような銅鉱石の製錬が始まると酸性雨のために草原化したこともわかってきました。長登銅山から産出した銅は奈良大仏の建立に用いられましたが、その当時使っていた鉱石の製錬では酸性雨は発生していなかったことも石筍から確認できました。

石筍の中に保存された記録を科学的に取り出す方法を私たちが確立することで、このようなひとと自然の関わりを語ることができるようになりましたが、得られた情報の確からしさは、古文書や古絵図などの考古資料との対比により行います。地球を理解するためには、いろいろな専門分野の研究者の協力がとても大切です。

連絡先：理学部自然環境科学科
松岡　史郎（内線 6172）
matsuoka@env.sc.niigata-u.ac.jp